

海を渡るプオク¹:シック² Kitchen across the Ocean: SIKGU

2023.9.8 Fri-10.9 Mon
13:00-19:00 (Close: Tue & Wed)

-
- 1 タイトルである韓国語の「プオク(早晩)」は、「火(プ r/ 晚)」の発音が変化し、現在においては「台所」を意味します。
 - 2 「シック(食口/肴子)」は「家族」の意味で、血縁関係でなくとも「一つ屋根の下で過ごし食事を共にする間柄」を指します。出身や立場に関係なく、食事を共にすることで、家族になれるという意味が込められています。

「食」は注釈の多い文章³。

「食」は私たちの身体に流れる物語。

3 本展においても、本文よりも重要な注釈に何度も出会う可能性があります。

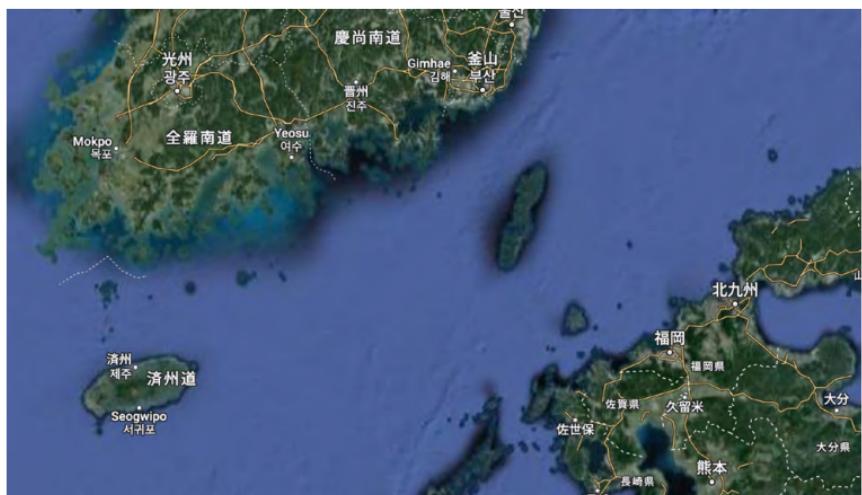


Image from Google Map

「食」は人間の根源的な欲求や個人のアイデンティティと密接な関係を結び、さらに生活、文化、社会に不可欠な要素です。九州と朝鮮半島の交流の歴史は1500年前から続いてきました。「食」においても、類似性を持つ食べ物が存在し、これらは戦争や移住などの歴史を経て、今の生活の中に溶け込んでいます⁴。

本展は、それぞれ釜山⁵と済州⁶を作品の背景とする作家二人が、福岡現地からの視点で新作を制作する記録です。韓国の食文化のベースである特有のサイクルや交流を基に、海を渡る物語を追跡し、共有し、味わい、連帯と楽しさを感じる場を作ることを目指しました。

OVERGROUNDは、商店街の中にあり、以前、スーパーマーケットだった場所を改装しています。「食」を身边に感じられるこの場所で、訪れた方がそれぞれの食の物語を持ち帰っていただければ幸いです。

4 九州地方と朝鮮半島は食においても密接な関係があり、その代表的な例としては、釜山から福岡に伝わった「辛子明太子」、朝鮮人鉱山労働者が食べていた料理から始まった「もつ鍋」、対馬から釜山の影島(ヨンド)を通じて初めて朝鮮半島に広がった「サツマイモ」などがあります。

5 博多港から釜山港まではフェリーで3時間。本展の参加作家であるキム・ドヒの出身地である影島(ヨンド)は韓国の釜山の内側に位置する島で、造船業、水産加工業などが発達した地域です。南に長崎県対馬市と接しており、日本植民地時代に多くの日本人が居住しました。朝鮮戦争の時期には全国の避難民が釜山に押し寄せました。お互いに連絡する手段がなかったため、「影島橋の下で会おう」と約束したという話が有名です。

6 済州は韓国の島の中で最も面積が大きく、最も人口が多い島です。韓国の南端に位置しており、済州の人々は朝鮮半島を「陸地」と呼びます。無盜(無泥棒)、無乞(無乞食)、無大門(無門扉)の「三無島」という異名をとっています。村人同士が助け合って生活し、乞食や泥棒がおらず、泥棒がいないので家の門もないという意味です。アニミズムやシャーマニズムを地域の伝統文化として重要視している特徴もあります。最近においては、済州道民の4分の1は外からの移住者であり、国際結婚率が10%に達しています。

会場では文化的理解を深めるためのリサーチコーナーが設置されています。

⑤ 福岡制作記録:特別アーカイブビデオ

家は夢としてしか存在しない

Home only exists as a dream

by Yongha James Hwang

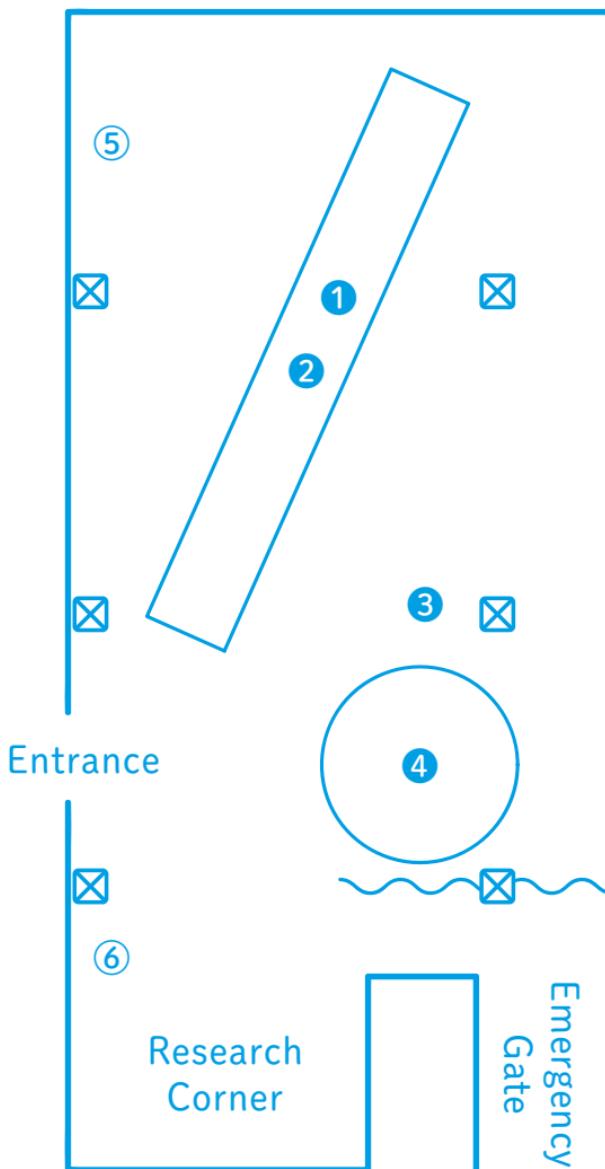
2023, Single-channel (color, sound), loop

⑥ リクリット・ティラヴァニ(Rirkrit Tiravanija)がイ・ユジンの住居兼スタジオで行ったキムジャン(キムチ作り/김장)パフォーマンスのインタビュー

Interview with Rirkrit Tiravanija

by Yujin Lee

2023, Single-channel (color, sound), 15 min 34 sec



展示の楽しみ方

● 来場者との「食」を通した小さな交流として、イ・ユジンが済州のお茶を用意しました。環境への配慮として、マイボトルやカップをお持ちいただいた方限定で提供させていただきます。お好きな席に座ってお召し上がりください。(無くなり次第終了)

● イ・ユジン《ペインティング・カンバセーション:ご飯泥棒物語》のテーブルにある18枚のレシピカードは、お好きなレシピカードを1人一点のみ持ち帰ることができます。(無くなり次第終了)

⇒作品 ① ②

● キム・ドヒ《キム・ミョンテの昇天記:サンヨ屋台ノリ》では、あなたの身近で思い出す死者の方に対する思いを自由に書いてください。

⇒作品 ④



Photo by Molly Stinchfield. Courtesy of Art Omi.

“アートではなく、友達を作ろう
(*Make Friends, Not Art*)” — Yujin Lee

Yujin Lee イ・ユジン (b.1986)

地域のアイデンティティやコミュニティの形成について考察しながら「関係性の美学 (Relational Aesthetics)」を実践するビジュアルアーティスト、コラボレーター。米国コネル大学美術学部で BFA、コロンビア大学芸術大学院でビジュアルアートの MFA を取得。2018 年にニューヨークから韓国の済州島に移り住み、古い農家を購入し、住居兼スタジオ「Next Door to the Museum」としてオープンさせた。畑、鶏や犬もいる質素な田舎の家を舞台に、国内外のアーティスト達が、生活とアートの表裏一体関係やエコロジー思想の文脈における創作活動ができるユニークなアーティスト・レジデンスを運営している。

yujinleeart.myportfolio.com

INSTAGRAM [@jejuanarchist](https://www.instagram.com/jejuanarchist)

参加型アートパフォーマンス

人生は(チョコレートの箱または)お弁当みたいだ

Life is like a (Box of Chocolates or) Bento

9.23 Sat 13:00

9.24 Sun 13:00

9.25 Mon 18:00

2023, Audience participatory performance,
Transparent plates and cups, specially
prepared tasting menu

* 各回人数制限あり・予約必要
予約方法は OVERGROUND のインスタ
グラム (@overgroundasia) からご案内
します。

① テーブルクロスであり、カーテンであり、お守りでもある絵画 A painting that is also a tablecloth, a curtain, and an amulet

2022, Natural paint on linen(148cm x 10m), Wooden table(120 x 970 cm)
*Jeju seokchangpo tea served

本作は2022年夏、アメリカ・ニューヨーク州の小さな田舎町で、新たな出会いや環境の中で生まれました。そして、ここ福岡でも予測不可能な出会いや状況を再び見つけようと実行されました。

作家は、壁に掛けられ商品のように展示される芸術よりも、触って感じたり、汚れたら洗ったりするなど、様々な用途で日常の中に位置づけられるような作品を作りたいと考えています。この作品はカーテンにもなり、テーブルクロスにもなり、さらに「周易⁷」の一部が描かれていることで、一緒に座った人々と占いをすることができます。また、この作品の上にもう一つの作品《ペインティング・カンバセーション》を重ねることで、済州と福岡の人々を屋根の下に呼び込んでいます。

② ペインティング・カンバセーション:ご飯泥棒物語 Painting Conversation: Stories of Rice-Thieves

2023, A series of 18 collaborative paintings, natural paint on linen(each 47.5x26cm), 90 min sound playing in a loop, various small object, 18 recipe cards

作家が2019年から継続して行っている「一緒に描くペインティング」プロジェクトの新作です。作家とコラボレーターは1対1で向き合い、決められた時間の間、一つのテーマについて話し合いながら自由に絵を描きます。

絵は全18枚あり、済州と福岡の人々が半分ずつで描いています⁸。済州と福岡を拠点に様々な場所から移住してきた人々は、韓国人がよく使う表現である「ご飯泥棒⁹」をテーマに対話し、描きました。天然塗料と済州の土で作家が直接作った絵の具を使って描いた絵は、洗濯後、乾燥させることで、テーブルマットとして生まれ変わります。また、今回の展示では、コラボレーターが共有した18のご飯泥棒レシピと、彼らが台所から持ってきたオブジェもご覧いただけます。

7 東洋で最も古い儒教の経典です。最初は占いをするために作られたものが、時代を経るにつれて儒教の学者たちによって哲学的な思索と深遠な思想という意味が加わりました。

8 [JEJU] Bae Jungja、Debbie Susana Mantik、Guhn Kim、Jaka、James Moon Lee、Lee Sukhyun、Ruangsak Anuwatwimon、SEHA、Shinhye Park / [FUKUOKA] Shiomallow、Jong Yugyong、Kawanobe Osamu、Kim Charlotte Kakoschke、Kim Kunchul、Ko Ryoka、Miyakawa Midori、Nomoto Reika、SoZo(アルファベット順/敬称略)

9 ご飯がすすむおかずのこと。ご飯が盗まれたようになくなるという意味です。韓国語では「パットドゥッ(밥도둑)」。



Photo by Dohee Kim

“生きるということは、お互いのエネルギーを取り合うこと” — Dohee Kim

Dohee Kim キム・ドヒ (b.1979)

人間の有機的な特性と原始的な物質感覚の関係をベースに、存在の意味を探求し、生命感覚を拡張する制作をしている。ほとんどの制作は、対象に対する直接的な経験から出発し、触覚的、嗅覚的刺激や振動、労働などを通して、身体とのかかわりを重視しながら、鮮やかな鑑賞体験へと広げていく。物質の状態が変化し、生き生きとする「生命の場」を経験として伝えるために、陰と陽、生と死、自己と他者など、相対的概念を持つ暫定的な特徴をダイナミックに表現する。その手法は、インスタレーション、写真、ビデオ、パフォーマンスなど様々で、極めて個人的で内密な制作から社会的なコラボレーションまで多岐に渡る。経験主義美術ジャーナル『ttheol』を発行し、編集長としても活動している。

kimdohee.com

[INSTAGRAM @4doheart](https://www.instagram.com/4doheart)

参加型アートパフォーマンス

サンヨノリの祈願（喪輿遊びの祈願）

9.24 Sun 18:00

SangyeoNori Pray (상여놀이 축원)

2023, Mixed media, installation, performance *各回人数制限なし

③ ガラク Garak

2017, Single channel video, color, sound

釜山チャガルチ魚市場¹⁰で使用する手や指のサインをオークションの鐘の音と共に編集、繰り返し再生した映像作品です。タイトル「ガラク」は韓国語で手の指（ソンカラク）につく単語であり、韓国伝統の音楽的単位¹¹でもあります¹²。また、本作には、人間と非人間の世界の秘密の境界を叩くことで平等に繋ぐサイケデリックな振動周波数の機能も含んでいます。鈴は韓国のシャーマニズムにおいて、生と死を世界と繋ぐ媒体です。作家の苗字である「金（金海 金）」氏の始祖が築いた連合国「ガラク国¹³」についても考えられます。作家は、舞と歌が生活と政治に溶け込んでいた鉄器文明「ガラク国」の原始性と冶金学の態度が、自身の作品全般において存在していると言います。

10 釜山広域市の代表的な魚市場です。1889年、日本漁民を保護しようと釜山水産株式会社を設立、その後1922年に釜山漁業協同組合が建物を建て、徐々に今のチャガルチ市場になりました。鐘が鳴ると、人々は音もなく指のサインだけで取引を行います。

11 音の高低に関連する旋律や装飾音を意味する（朝鮮民族の）国楽用語。

12 お酒の席で盛り上がると箸を叩きながら歌を歌い、「ガラク」を作る日常もあります。

13 狗邪韓国（くやかんこく）。駕洛国（からくこく）、または金官国（くんかんこく）と呼ばれた。42年から532年まで朝鮮半島南部にあった国。新羅（しんら）に滅ぼされた。建国神話では、人々が歌を歌い、踊ることから王が誕生する。

④ キム・ミョンテの昇天記：サンヨ屋台ノリ The Story of Kim Myung-tae's ascension: Sangyeo Yatai Nori

2023, Mixed media, installation

本作は、棺を運ぶ韓国の伝統御輿である「サンヨ（喪輿/상여）」と福岡の「屋台」から着想を得たものです。食べることと同様に、死は誰にでも訪れ、エネルギーの循環を生み出すものです。韓国の伝統葬儀は「死」という出来事を「生」へと繋げるエネルギーに転換させる儀式でもあります。サンヨは村人が一緒に作り、保管、共有する共同体の文化として、出身や立場に関係なく、誰もが最も豪華な紙花で飾られたサンヨに乗って墓地に向かうためのものです。村人たちが最後の道を共に見送り、死者が孤独にならないように歌を歌い、葬儀の期間中は共に食べ物を用意し、知らない人が来ても分け合います¹⁴。日本人にとっては、誰もが集まって食事ができる「福岡の屋台¹⁵」や、疫病を退治するために由来し今も続いている「博多祇園山笠」を連想させる形です¹⁶。

作中の「キム・ミョンテ」は、釜山影島の海で生を終えた作家の祖父の本名であり、朝鮮半島で古くから庶民が様々な儀式で使った魚である「明太(ミョンテ)」¹⁷(スケトウダラ)を指す名前です。キム・ミョンテは1930年代から日本の船舶で働き、酒に酔うと耳で覚えた日本語の船舶用語を繰り返し話していました¹⁸。その言葉は現在においては誰も使ってない死語になっていますが、ハングルの表記として本作に刻まれています。

また、命を意味する「米」、北斗七星の形をした穴が見られます。その上にぶら下がっている「ミョンテ」(スケトウダラの干物)は人間の身体と一致する象徴物としての食べ物であり、生命循環の媒体として存在します。「ミョンテ」は生命の継続として、すべてを包含するより広い世界としての「海」を渡っています。

14 韓国の祭祀の風景で、食べ物を少し器に入れて外に置いておく風習が見られます。動物や通りすがりの靈にも食べ物を与える行為です。

15 戦後、人々が生活のために屋台での商売を始め、発展していきますが、GHQの取り締まりにより1949年頃から「1955年には屋台の全面廃止」が謳われました。しかし福岡では連合会が設立され、厚生省への交渉と努力により、屋台の廃止は免れ、営業許可を得ることができました。

16 作家は、福岡の屋台が、きれいに仕上げられた日本の美学的造形美とは異なり、仮設の痕跡や年月をそのまま露わにしており、プライベート空間を重視する日本人が全く知らない人と密接に密着して座っていることから、例外的な活気を感じたと言いました。

17 朝鮮語から魚の「スケトウダラ」の別名です。韓国語で彼の名前「ミョンテ」は「明太」と同音異義語です。韓国でスケトウダラは、祭祀、結婚式などで邪悪な気を追い払う守護物とされ、民間信仰で豚や牛のような獣よりも愛されています。乾燥させても完璧な造形が保たれることから、人間を代用する供物として使われてきました。

18 影島には大小様々な造船所が集まっています。造船業を中心とした産業化は、1887年に田中造船所が影島に進出したことをきっかけに、日本型漁船を普及させ、本格的に始まりました。



本展に関する場所をマッピングしました。
[こちらからご覧いただけます。](#)

メインキュレーター紹介

チョ・ヘス (Hyesu Cho)

韓国釜山出身。東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科修士課程在籍。

2020年釜山ビエンナーレコーディネーター、2022年江陵国際芸術祭アシスタン

トキュレーターなど。社会的な文脈で美術の境界を探求し、実践的コミュニケーションとしてのキュレーションについて考える。

EAG

韓国、日本、中国出身の3人(Hyesu Cho、Naoko Tanaka、Qiuyu Jin)から構成されたキュレーションチーム

eag.iamhere@gmail.com

メインキュレーター : Hyesu Cho

キュレーション : EAG (Hyesu Cho, Naoko Tanaka, Qiuyu Jin)

共催 : 韓国国際文化交流振興院 (KOFICE)、OVERGROUND

主管 : Hyesu Cho

後援 : 韓国文化体育観光部、韓国国民体育振興公団

テキスト : Hyesu Cho

編集 : Naoko Tanaka

グラフィックデザイン : Qi Shao